書評：世界中の友に贈るメッセージ ショーン山下

私が柳井市の国立療養所柳井病院（当時）に２回目の入院していた2000年、看護婦さんから相談を受けた。

アメリカで駐在員をしていた人だけど病気になって奥さんと別れて柳井に帰ってきている人がいる。手足が不自由なのだがパソコンはできる。パソコンを使ってできる仕事はないだろうか。

この相談は難問だ。これを受けて会長の小坂にさらに相談して県に登録してある特定疾患の患者会の会長の連絡先が分かり、伝えた。

看護婦さんは自分からそこに何度か連絡をしてやっと話ができたが、とても仕事の話にはならなかったと後日教えてくれた。

それから４年が過ぎ、相談主の名前も病名も分からないまま、気になっていた。

今年の２月新聞にその人が出ていた。それがショーン山下だった。1957年柳井市生まれ、家電メーカーの北米駐在員だった1995年多発性硬化症（MS）を発病、病気休暇し治療とリハビリの結果、職場復帰するが、病気の症状のため退社、離婚。柳井に戻ったという記事だった。

もうひとつ個人的にショーン山下に興味を持つのは、多発性硬化症（ＭＳ）という病気だった。ＭＳは特定疾患に指定されている病気で神経を包む鞘（さや）の炎症で起きる免疫性の疾患だ。この病気は炎症を起す神経の部位によって身体のさまざまな場所が機能不全に陥るが、初期症状としてはよく視神経炎が起きる。

私は視神経炎症を高校入学時にやり、入院治療のため一年間休学したことがある。（奇しくもその専門病院は兵庫医大病院だった）

記事は、病気にもかかわらずショーン山下が本を２冊出版したことを告げていた。それが『世界中の友に贈るメッセージ』（碧天社、千円）だった。

ショーン山下は５月ＮＨＫ山口の番組でも紹介され、５月末柳井市のアクティブやないで彼を囲む集会があった。

平生図書館にはこの本が郷土史に分類されて蔵書していたので借りて読んでみた。

最初は、多発性硬化症の話だが、やがて途中からこの本のタイトルのように彼と親交のあった世界中の友だちの話と彼らに贈るメッセージになっている。1980年から1995年まで彼が体験した世界の街の話がとても興味深い。

利き腕の左手と左足が動かず、左眼も失明しているショーン山下は、60%しか見えない右目と左手でパソコンを操作して病棟でこの原稿を書いたという。身体だけでなく、言語、記憶、思考などの精神面の障碍とも闘いながらの執筆だった。

集会で会った彼は車椅子に座り、スピーチ原稿を６回書き直したことを話した。そのためかお疲れのように見えた。

もう一冊は『追慕－レギーネと共に－』（碧天社）という初恋の人のことを描いた作品。　（文責：南　眞治）